

ホイットィアの *Snow-Bound* について ——その伝記的背景と宗教性

根 本 泉

On Whittier's *Snow-Bound*: With Special Reference to the Writer's Biographical Background and Religion

Izumi NEMOTO

I. はじめに

ジョン・グリーンリーフ・ホイットィア (John Greenleaf Whittier, 1807-92 年) は、現在の日本において、必ずしも名の通った詩人ではない。しかし、彼がアメリカ文学史上において占める位置は、大きなものがある。彼の名は、まず、奴隷制度廃止論者として記憶されている。彼が生きたのは南北戦争をはさむ、まさに激動の時代であった。彼はジャーナリストとして奴隷解放運動に献身するとともに、一時マサチューセッツ州議会議員をも務めている。しかし、ホイットィアは *Legends of New England* (1831 年) 等の出版によって、詩人として世に出て以来、黒人弁護の活動を行う一方で、彼の故郷にちなむ地方色豊かな作品を発表し続けた。

彼の代表作と目される *Snow-Bound: A Winter Idyl* (1866 年) が出版されたのは、南北戦争で北軍が完全な勝利をおさめて後のことである。この 700 行におよぶ長詩の中で、ホイットィアは自らが生い育った農家を取り囲む美しいニュー・イングランドの自然、生活を共にした人々が語ってくれた物語、そして、熱心なクェーカー教徒の家庭で得たキリスト教信仰についてうたった。この詩は出版時、アメリカにおいて大変な好評を博した。

明治期の日本において、ホイットィアに注目した人物の一人は、思想家・キリスト教徒の内村鑑三であった。若き日に北米で留学経験をした彼は、アメリカの詩人たちを愛し、訳詩集『愛吟』(1897 年)、文学論『月曜講演』(1898 年、後に『宗教と文学』に改題) 等の中でホイットィアを取り上げ、紹介している。また、内村の処女作『基督信徒の慰』(1893 年) には、*Snow-Bound* からの引用が見られる。それは、次の二行である。

“Love does dream, Faith does trust

Somehow, somewhere meet we must.” — Whittier.⁽¹⁾

内村は、いわゆる「第一高等中学校不敬事件」(1891 年) の後に病気でこの世を去った妻かずとの、復活における再会の希望を、この詩行に読み取っている⁽²⁾。

ホイットィアの *Snow-Bound* は、明治期から昭和にかけての知識人である新渡戸稲造の名著 *Bushido: The Soul of Japan* (1900 年) にも引用されている。第 17 章(最終章)「武士道の未来」(“The Future of Bushido”)の終わりで、新渡戸は、武士道は「独立した倫理の掟としては消え去るかもしれないが、「人生を豊かにする」武士道の持つ「香氣」は、「空を漂って来るであろう」、と述べて、最後に、以下の *Snow-Bound* の結びの 4 行を用いて締めくくっている⁽³⁾。

“The traveller owns the grateful sense

Of sweetness near, he knows not whence,

And, pausing, takes with forehead bare

The benediction of the air.” (756-59)⁽⁴⁾

内村と新渡戸の例から、この詩が当時の日本の知識人においては、ある程度知られていたことがわかる。引用箇所に限って言えば、前者、内村の場合には、*Snow-Bound* の宗教的な側面をよりはっきりと意識して、自らの人生に結び付けている。

Snow-Bound は、ホイットィアの幼い頃の思い出と自然を歌った牧歌的な（副題に “idyl” とある）詩であるが、その所々に見られる死と来世という宗教的テーマが、その中で重要な位置を占めていると考えられる。それはこの詩がホイットィアの愛する母と妹エリザベスの死後に書かれたことと深い関わりがあるであろう⁽⁵⁾。また、彼が熱心なクェーカー教徒であったことを考えれば、そのキリスト教信仰、特に来世信仰が、この詩に影響を及ぼしていることは十分あり得るであろう。

本小論では、*Snow-Bound* に見られる来世信仰に注目し、ホイットィアの伝記的背景との関連において論じたい。

II. ホイットィアの生涯と *Snow-Bound*

ジョン・グリーンリーフ・ホイットィアは、マサチューセッツ州ヘイヴァーヒルの農場で、1807 年に、父ジョーゼフと母アビゲイル・ハッサーのもとに生まれた。彼の祖先は、迫害を逃れてイギリスからアメリカへ渡ったクェーカー派（Quakers、正式には「キリスト友会」または「フレンド派」（Society of Friends））であった。ジョンは、父ジョーゼフと共に働きつつ、この農場で少年時代を過ごした。ここが、後の作品 *Snow-Bound* の舞台となっている。

幼いジョンにその詩人としての才能に目覚めさせる契機を与えたのは、スコットランドの国民詩人ロバート・バーンズ（Robert Burns、1759-96 年）の詩であった。バーンズの詩集をジョンに貸してくれたのは、彼の最初の小学校教師であったジョシュア・コフィンである。このバーンズの詩に刺激されて、ジョンは自ら詩を書き、それが Newburyport の *Free Press* に掲載された。この新聞の当時の編集者は、ウィリアム・ロイド・ギャリソン（1805-79 年）であった。彼は、後にアメリカの最も有名な奴隷制廃止論者となった人物であった。ギャリソンとの出会いは、ホイットィアの人生を大きく方向づけることになる。ギャリソンはジョンに関心を寄せ、父親にジョンの教育の必要を説き、貧しい家庭のジョンは、結局、靴作りの仕事を覚えることで、ヘイヴァーヒル・アカデミーでの二学期間の勉学をなすことができた。

その後、ホイットィアは、いろいろな地方の有力紙の編集者を勤め、1835 年には、マサチューセッツ州議会議員に選出され、一期を務めた。その後、彼は母と姉妹たちと共に、農場から近くのエイムズベリーの家へと移った。彼は終生ここに住むことになる。

ホイットィアの人生において、一つの転機となったのは、*Justice and Expediency*（1833 年）の出版であった。この書は、彼の奴隷制廃止論者としての高らかな宣言となる。そのことによって、彼は、事務所が略奪される、焼かれる等、様々な迫害を受けた。

ホイットィアは、1830 年代から 50 年代にかけて、奴隷制度廃止を支持する新聞にかかわる仕事を務める傍ら、彼の故郷にちなんだ作品を書き続けた。彼の公刊された最初の作品は、先に述べた、散文と詩からなる *Legends of New England*（1831 年）であり、最初の詩集は、*Lays of My Home*（1843 年）であった。そのような執筆活動において、ホイットィアに、最も大きな成功をもたらした作品の一つが *Snow-Bound* である。

この詩は、1865 年には書き始められていたようである⁽⁶⁾。先に述べたように、この詩は、自分よりも先に亡くなった人々——特に母とエリザベス——を懐かしむ思いに満ちているとともに、そこには、ホイットィア自身の問題としての死に対する思いと来世観が示されているといえる。しかし、ホイットィアがこの世を去ったのは、この詩の出版（1866 年）より四半世紀後の 1892 年のことであった。

III. *Snow-Bound* の宗教性

Snow-Bound は、大雪の日々に暖炉を囲んで、親、親類、知人等が話してくれた物語が、その大半を成している。そこには、様々の冒険談、昔の物語などが含まれているが、それらにはさまれる様にして、詩人の思想が示されている。ここでは特に、来世信仰に見られる、詩人のキリスト教思想に目

を向けてみたい。

ホイットィアの来世信仰は、最初に詩の 175-211 行に見られる。ここで特徴的なのは、詩の語り手が暖炉の火について述べていることである。外界の冷たさと対照をなす屋内の火（暖炉の火）と後に述べる星の光は、ホイットィアの来世信仰の叙述と深い関わりを持つものと考えられる⁽⁷⁾。ここでは、今や世にいない人々の顔を、かつて暖炉の火がちかちかと照らし出した様子が描かれる。

The dear home faces whereupon
That fitful firelight paled and shone. (185-86 行)

しかし、もはや彼らの声は聞こえず、彼らの顔は見えず、影もなく、足音も聞こえない（189-99 行）。それでもなお「愛」は亡くなった人との再会を「夢み」、神への「信仰」はその再会を「信ずる」であろう、と詩人は次のように続ける。

Yet Love will dream, and Faith will trust,
(Since He who knows our need is just,)
That somehow, somewhere, meet we must. (200-02)

さらに詩人は、このような望みを抱くことができない人について、次のように悲しみの言葉を発する。

Alas for him who never sees
The stars shine through his cypress-trees!
Who, hopeless, lays his dead away,
Nor looks to see the breaking day
Across the mournful marbles play! (203-07)

ここで注目すべきことは、詩人が悲しんでいるのは、死者を葬るこの人が、喪の象徴である「イトスギ」（“cypress-trees”）の向こうに星が輝くのを見ず、「大理石」（“marbles”＝墓石）の向こうに「夜明けの光」（“breaking day”）が戯れるのを期待していないことである。逆に言えば、詩人は、そこに星の輝きを見、夜明けの光を期待しているといえる。ここで、喪を象徴するイトスギの向こうに星の光を見、墓石の向こうに夜明けの光を期待する、という思想が示されているのは興味深い。特に「夜明け」は、イエス・キリストの復活の朝を連想させるものであり、ここにはホイットィア自身の来世信仰、復活信仰が表れている、と考えられる。

詩人は、死者を葬ったこの人が、これらの光を見ることも、期待することもできない理由として、彼は「肉」（“flesh”）にも「知覚」（“sense”）にもまだ知られざる「真理」（“truth”）を学んでいないのだ、と述べる。詩人によれば、その真理とは次のような事柄である。

That Life is ever lord of Death,
And Love can never lose its own! (210-11)

つまり、「生命」（“Life”）は常に「死」（“Death”）の主であり、「愛」（“Love”）は決してその愛する者を失うことはない、ということである。

ホイットィアは、以上のように彼の死と来世についての思いを表明した後、この詩の大部分を占める、思い出の人々の描写、彼らが語ってくれた昔語へと移る。そこでは、学校の教科書に出てくる物語、父、母、おじ、おばが語ってくれた話が順に述べられる。そして、続いて、姉メアリーと妹エリザベスの思い出が語られる。ここでは、詩人が最も愛し、この詩が書かれる一年前に死去したエリザベスについての詩行に注目してみよう⁽⁸⁾。それは、392-437 行である。ここでまず現れるのは、天国のイメージである。すなわち、幼い日に我が家の居間の「まだら模様編んだマット」（“motley-braided mat,” 395 行）の上に座り、もの問いたげな目でわたしたちを見上げていた彼女の大きな目が、今も天国からわたしを見つめてくれているだろうか、と問うのである（392-403 行）。この天国の描写は聖書的であって、ヨハネの黙示録にそれに近い表現が見られる。たとえば、「静かな川の銀色の

流れ」(“Silver reach of river calms,” 402 行)である。この箇所は、「水晶のように輝く命の水の川」(第 22 章 1 節、新共同訳)を連想させる。ここには明らかに、ホイットィアのキリスト教信仰の影響が見られる。

詩人は続けて、彼女と共に野山を散策した時の思い出を語る(407-17 行)。そして、彼女の逝去によって今失われているものを、咲き誇る花や鳥の歌声の中に見出そうと、目を見開き、耳をそば立てる(418-21 行)。その時、詩人は、自分が今、亡き彼女とのつながりにおいて、彼女の生前より以上に、豊かな存在とされていることに気づくのである(422-23 行)。すなわち、彼が「不滅」(“immortality”)の姿の彼女と共有して持つ「富」(“wealth”)は、安全なのである。詩人は次のようにうたう。

Safe in thy immortality,
What change can reach the wealth I hold?
What chance can mar the pearl and gold
Thy love hath left in trust with me? (424-27)

ここでは、彼女の愛が詩人に残してくれたものを、「真珠」(“pearl”)や「金」(“gold”)のような財産のイメージを用いて表している(426 行)。

さらに、詩人は、自分が「人生の午後遅き時」(“life’s late afternoon”)を歩まねばならない、と述べる(428 行)。やがて夜が訪れ、詩人にとって、妹の存在は近く感じられるようになる。それは、天使が近くに控え、「日没の門」(“sunset gates,” 434 行)の横木をはずす時に、彼女が現れ、詩人を迎え入れてくれるからである。この美しい描写を以下に引用しよう。

Shall I not see thee waiting stand,
And, white against the evening star,
The welcome of thy beckoning hand? (435-37)

この箇所では、妹が立って詩人を待ち、手招きする様子が描かれているが、彼女の手は「宵の明星に照らされて白く」(“white against the evening star,” 436 行)、とある。この一行は、先に、ホイットィアの来世信仰を示す最初の箇所の中で言及した、「イトスギの間から、星が輝くのを！」(204 行)という表現を思い起こさせる。ここにも、「光」のイメージによって示される詩人の来世信仰・復活信仰の特質を確認することができるのである。

ホイットィアは、以上のようにエリザベスについてうたった後に、さらに、彼の家族以外の下宿人についても、その思い出を語っている。そして、やがて雪が止み、雪解けとともに明るい世界が戻ってくる様子が描かれる。

第 1 章の冒頭で述べたように、Snow-Bound は、詩人の幼い頃の大雪の経験をうたった郷愁の詩である。しかし、全体を通して見た場合に、人々の昔語の前の箇所に見られる死と来世・復活についての叙述(175-211 行)と妹エリザベスの思い出と再会への希望を描いた箇所(392-437 行)は、この作品の思想的な中核を形作っていると考えることができる。

IV. おわりに

先に、ホイットィアの祖先がクェーカー派としてアメリカに渡って来たことと、ホイットィア自身、熱心なクェーカー教徒であったことに触れた。キリスト教の重要な教義の一つである復活信仰は、また、信者自身がキリストの復活に与り、来世において復活するとの「来世信仰」に結びつくものである。この詩においては、ホイットィアの復活信仰・来世信仰が、雪に閉ざされた生活や親しい人々との交わりの描写と相俟って、象徴的に表されている。第 3 章の冒頭で述べたとおり、外界の雪と暖炉の火とが、まず対照的に描かれる。さらに、来世の存在を象徴する星の輝き、夜明けの光、宵の明星が示される。そして、吹雪から雪解けに至るこの長詩全体の枠組みそのものが、死からの復活を思

わせるものである。このように考えれば、第3章で論じた、復活をうたった二つの箇所は、ホイットリアの *Snow-Bound* における要ともいえるべき役割を果たしているといえるのである。

注

(1) 鈴木俊郎他編『内村鑑三全集』第2巻（岩波書店、1980年）、9頁。内村が引用した *Snow-Bound* の原文は以下の通りである。

Yet Love will dream, and Faith will trust,

(Since He who knows our need is just,)

That somehow, somewhere, meet we must. (200-02)

内村はこの三行のうちの二行目を省いて引用しており、引用部においては、語および句読法に関して、一部正確さを欠く箇所がある。なお、上記の *Snow-Bound* の出典は次の通りである。John Greenleaf Whittier, *Snow-Bound: A Winter Idyl*, *The Norton Anthology of American Literature*, 4th ed. (New York: Norton, 1994) 1415. 以下、本稿に於いては、*Snow-Bound* の引用は同書からとする。

(2) 第一高等中学校（後の第一高等学校）の嘱託教員であった内村は、1891年1月9日の教育勅語奉読式で、勅語に対して最敬礼をしなかったために、中学校を依願解嘱となった。この間、彼は肺炎のために臥し、その看病にあたった妻が、内村の回復後、同年4月19日に病氣のために逝去した。

内村よりキリスト教信仰の教えを受けた者の一人、川西実三（元東京府知事）の三男川西瑞夫の遺稿および追憶集『みづばさのかけに』（みすず書房、1965年）には、瑞夫が生前、ホイットリアの *Snow-Bound* を母田鶴子と共に読んだことについての記録がある（同書92頁）。川西田鶴子によれば、瑞夫が死去した半年後に、田鶴子は、瑞夫の墓の名刺受けに、瑞夫が感銘を受けて誰かに抜き書きして送ったと思われる *Snow-Bound* の一節を発見した。それは、注(1)で言及した内村の引用箇所が始まる12行（200-11行）であった。田鶴子は、感謝の涙とともに、この句を誦したとある（同書92頁）。この記述から、内村鑑三、および彼の信仰思想（無教会）の系譜につながる人々が、ホイットリアの詩の、主として宗教的な側面に関心を寄せていたことが伺える。

(3) 引用の訳文は、新渡戸稲造著、佐藤全弘訳『武士道』（教文館、2000年）による。

(4) Inazo Nitobe, *Bushido: The Soul of Japan* (Tokyo: Kenkyusha, 1935) 201.

(5) Samuel T. Pickard, *Life and Letters of John Greenleaf Whittier*, vol. 2 (Boston: Houghton, 1894) 494 および Roland H. Woodwell, *John Greenleaf Whittier: A Biography* (Haverhill: Trustees of John Greenleaf Whittier Homestead, 1985) 329 を参照。

(6) Pickard 494.

(7) ホイットリアは、*Snow-Bound* の冒頭において、コルネリウス・アグリッパ（Cornelius Agrippa, 1486-1535）の *Occult Philosophy* からの文章およびエマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）の詩 *The Snow-Storm* の一節を引用し、火の持つ力等について述べている。

(8) 妹エリザベスの性格およびホイットリアとの関係については、Pickard, vol. 1, 29-30 を参照。